

全部一応見るのですが、まだ使えるし、もっ  
たいない、捨てたら後で後悔するかもしれないからと、ため息をついてまた元  
に戻してしまいます。結局なにも整理できず減らなかった。そして先に述べたよう  
に、この「片付けなければ」というプレッシャーがいつも頭の隅に居座っている  
のです。

この時、手離せない理由、捨てられない大きな理由が、この「もったいない」、  
「まだ使える」、「後で後悔するかも」です。

また人間はおかしなもので、自分が捨てようと思っていたモ  
ノでも、他人に勝手に捨てられると腹が立ちます。つまり選択の権利を奪われた  
ことに腹が立つのです。やはり自分のモノは自分で決める、自分で捨てることが  
基本なのです。

現場でわかったのは、ある程度の年齢を超えられた方ほど、モノがあることが  
安心感につながるということでした。ガラクタであろうが中身がなんであろうが、  
これまで一緒だったモノたちに囲まれていることで安心されるのです。

それに対して、「これ、もう使えませんよね。捨てますよ」と処分してしまう  
と、ガクッと落ち込んでしまわれます。おまけに、その場では、「わかった、わ  
かった」と言って捨てても、翌日にはまた戻っている。

じつは捨てることに納得しておられないのですが、ヘルパーや家族と口論する  
のは嫌なので一歩譲った振りをして「うんうん」と聞いた振りだけして、その後、  
ゴミ置き場から拾ってこられるのです。

それはまだマシなほうで、極端な場合は、盗難騒ぎに発展します。  
「捨てますよ、いいですね」と了解を得て捨てたつもりが、「持っていかれた！」  
とか「泥棒が入った！」とか「あなたが盗ったんでしょう！」といったことをお  
っしやるお年寄りも少なくありません。おまけに、ここに認知症が重なると、話  
はさらに複雑かつ面倒になっていきます。

対して、私はそれよりもっと前の段階で、老いる前にモノを整理する、生活を  
整理することを「老前整理」として提唱し、商標も登録しました。自前のセミナ  
ーや行政、企業からの受託講座により、この考えの普及に取り組んでいます。

迷いの原因はおそらく四つほど考えられます。

まず、ひとつ目が、いつか使えるかもしれない、ふたつ目は、捨てるのはやは

りもつたいない、三つ目は、あとから「捨てなければよかった」ときつと後悔するはず、四つ目は、直せばまた使えるといったところでしょう。

多くの書類は (1) の「本当に必要かどうか」と考えてみると、否で、ほとんどが**思い出の品**と化しています。段ボール箱の中には、「いつか」「そのうち」**見直そう**として忘れられた書類がたくさん眠っていることでしょう。

ある新聞の投書欄に、妻を三年前に亡くした九〇代の男性が、妻と結婚する前に恋した女性を忘れることができないと書いておられましたし 六〇年前の片思いの彼女を今も夢に見るそうです。

この話をわからないことはないと思う男性と、信じられない裏切りだとあきれ女性が目には浮かびます。

あの世で妻はどう思っているでしょう。五〇年以上連れ添った夫が、自分が亡きあと悲しんでくれるのならいざ知らず、昔の彼女を思っているなんて……。

他にも残されて困るモノはいろいろあります。たとえばエロ本やエロビデオのたぐいです。あるお宅で遺品整理を始めたら、亡き夫の書斎の物入れからそうしたモノが大量に出てきて、家族一同は仰天したそうです。夫は中学校の校長を長年務め、堅物と評判な人でした。こんな趣味があったとは、と家族は当惑することしきり。廃棄しようにも、普通の雑誌や本ならば古書店に引き取りを頼むか、町内会の廃品回収に出せばいいのだけれど、こんな本はとでも出せない。

少しずつ千切ってゴミに出そうかとも思ったが、そんなことができる量ではない。それに何百本のビデオもある。結局、息子が車で遠くの町の廃棄場に持ち込みました。この人は法を犯したわけではありませんし、趣味のコレクションを残しただけです。ただ、残された家族のことを考えていなかったのです。

子どもとの思い出の品というのは、**子どもよりも親にとっての思い出**であるということ肝に銘じて、巣立ったお子さんと話し合いながらモノを片付ける。

実は、人間関係というのは男性よりも女性のほうが柔軟です。**女性は生活の目線で人間関係をつくる傾向にあります**から、働いている女性でビジネスライクに仕事だけのお付き合いというのはあまりなく、気づけば一緒に近くのデパートで仲良くバーゲンセールを回っていたりするものです。

ところが男性の場合、いくつになっても、社長だ、部長だ、という枠組みが残ります。長年会社で働いた男性ほど、女性とは違って仕事と生活が分離していません。そうした固まった頭のままでは、引退後に、もう誰も寄ってきません。

こうして住み替えやこれからの暮らしを考えると、「荷物を減らす必要」が必然的に生じます。先の減築や一戸建てからマンションへ、あるいは老人ホームへ移り住むと、驚くほど収納スペースが小さくて荷物が入らないからです。早めに、一軒家の維持にどれだけの費用がかかるのか、もっとコンパクトなところへ住み替えたらどれくらいの費用ですむのかなどを比較・検討してみるといいでしょう。